‘ὁ κόσμος, ἀλλοίωσις· ὁ βίος, ὑπόληψις.’

40号 1991.10.4
文・編集・発行
恋怪子

CD: GUNS N' ROSES 「USE YOUR ILLUSION」

アルバム・タイトル「USE YOUR ILLUSION」に、まずグッときた。2枚で30曲152分5秒っていうのもうれしい。そして、その152分5秒(2時間半ってことですよ!)全部みごとなロックンロールっていうのがサイコー!!!

Iの10曲目「NOVEMBER RAIN」のアクセル・ローズのヴォーカルには胸をうたれたし、IIの4曲目「KNOCKIN' ON HEAVEN'S DOOR」は実にパンクな感じがしてききごたえがあった。

TIME INTERNATIONAL 9/30号(部分)

The Gunners stick to the serious business of rock 'n' roll, synthesizing the Stones and the Sex Pistols to produce Aerosmith for the '90s. They never drift very far from the jackhammer style that began to dominate the idiom two decades ago. This is the main reason their audience is not entirely limited to 16-year-old boys with baseball caps worn backward. Guns N' Roses tenaciously clings to hard rock's tradition of being loud, mean and obvious. No one alive looks more like rock stars than Rose, 29, and guitarist Slash, 26, with their tattoos, their headgear, their emotional problems (Slash has frequently used heroin, and Rose is a manic-depressive) and their we-sold-our-soul-to-rock-'n'-roll attitudes.

The *Use Your Illusion* albums seem certain to keep selling well. Although the first album is better than the second, and although neither contains a song as memorable as *Sweet Child o' Mine* or *Paradise City* from the *Appetite for Destruction* album, both are exciting, well-produced records, with plenty of catchy rockers and only a handful of outright duds. The guitars are hot, the drumming is hot, the vocals are red-hot. Anyone who can get past the offensive lyrics will be buying one of the best rock albums of the year. Or two of them.

ニューズウィーク日本版 10/3号(部分)

今日のアーチストは、明るい未来を夢見るそぶりなど見せもしない。むしろ自分たちが受けてきた仕打ちを継承し、暴力的な弱肉強食主義に走りがちだ。

その責任をすべて彼らに求めるわけにはいかないが、彼らのほうも相当のワルである。ガンズ・アンド・ローゼズのアクセル・ローズは叫ぶ。「どこいるのかわかってるのかよ/ここはジャングルなんだぜ」

NWAは現状をベトナムの戦場になぞらえる――しじゅう弾丸が飛び交い、子どもたちが日常的に殺人を見て育つ世界だ。メタリカのメンバーは、自分たちは本質的に野獣だと公言している。

彼らはベトナム戦争当時のプロテストシンガーのように、自分なりの道徳的解答をひけらかしたりはしない。むしろ上の世代が始めた道徳破壊の産物を自認している。

今、ロック界の担い手たちを燃え立たせているのは、怒りの感情である。ガンズ・アンド・ローゼズやメタリカ、NWAは自分たちの怒りを表現するだけでなく、それを商品にすることもできる。だが、怒りそのものを解決することはできない。これでは泥沼だ。

そして彼らは、いずれも最新アルバムの最後のほうで息切れを起こしてしまった。アクセル・ローズは二枚のアルバムを通して奮闘したあげく、「倉庫」という名の曲で分裂病末期の感情喪失の世界に安らぎを見いだした。しかしその休息は、マライア・キャリーの歌詞にあるロマンチックな予定調和と大して変わらない。

CROSS BEAT 10月号

正直言って僕はガンズ・アンド・ローゼズの熱心なリスナーではない。前情報で知られている通り、彼らが往年のパンク・バンド達のナンバーを取り挙げたというのがなければ、このレビューは引き受けなかっただろう。結局カヴァー曲は今回見送りで聴けず残念だが、ガンズのルーツの一つにパンクがあるのだというのを知って以来、妙に好意を寄せていたのだ。

天衣無縫のアーティストのカッコ良さというのがある。何をやらせても様になるというヤツだ。僕だったらすかさずイギーやラモーンズを挙げるところだが、今のアメリカのキッズにとっては、ガンズがそれなのだろう。ロックンローラーとしての最上級のスタイルを現在進行形で体現するのが彼らなのだ。ヒーローはそんな過大な期待を裏切ることはしない。3年待たせようが、2枚で合わせて30曲出そうが、何をやろうが勝手である。でも決してファンを失望させたりはしない。やるときはバッチリ決める。今回の大作でも、それを見事に証明してみせたようだ。

――関口弘

確かに、2枚別売りする必然性があるのかというと全然ないし、“ドント・クライ”は両方のアルバムに分けて入れる程、目立って違うヴァージョンになってもいない。ウィングスのカヴァーの“リヴ・アンド・レット・ダイ”も、原詞のイメージはガンズにぴったりだが、サウンド的には、やはり浮いてる。という具合に、ヴォリュームを増した分だけ問題点もそこら中にある作品だ。しかしバンドが、というよりアクセルが、ここで目論だのが、“俺様の自由”であった以上、そうしたアラ捜しをしたところで、ちっとも鬼の首を取った気分にはなれない。ロックが精神世界を豊かにし、現実について考える為の糧となり、ひいては人を成長させる等というきれいごとはハナから一蹴されている。ロックしかやれない社会不適応者が、いつまでのロックばかり聴いてる連中を、こづき倒す為だけの不毛そのものの凝縮としてのロック。その不毛に疑念を持たせない為のスピードとパワーならば、ここには十分ある。

――米田実

PERSON: ジェイムス・ヘットフィールド(メタリカ Vo&G)

「ラップが嫌いなだけだよ。ブラック・ミュージックはイイよ…というか別にブラック・ミュージックに反対してるわけじゃない。ブルーズやモータウンのものは凄く好きだし…。でもラップはダメだ。あれだけは怒から放り出してくれ。(笑)」

「俺にとっては退屈なんだよ。俺は人が自分に対して何か言っているのを聞くのは好きじゃない。ラッパーのやっていることは基本的にはそれだろ?『俺はこれをやった、俺はあれをやってあれした、こうした』よしてくれよ。(笑)とても利己的に聴こえる。」

METALLION Vol.5より

音楽的な意味で、おもしろいと思ったのは、彼のヒップホップについての意見で、音楽的に嫌いなだけでなく「ラップの中で自分の名前を何百回も繰り返すエゴマニアぶりにはウンザリする」といっていたが、これはかなりの若者の正直な意見でもある。当然彼はファンク・メタルといわれるバンド群も嫌いで「メタルバンドならメタルをやれ」という意見だ。もう一つ、メタル以外で好きな音楽という話をしたら、トム・ウェイツの名が出てきた。彼の歌詞にあるドライなユーモア、ウィットが好きなんだそうである。意外という気もするが、一方そうかもしれない」とも思う。

私はジェイムズに初めて会った時から興味を持った。こちらが一を聞くと十答えてくれるラーズ(ウルリッヒ)と違い、その頃のジェイムズは十聞いても二〜三答えが戻ってきればいいという風で、それをインタビュー記事にしなければならない者にとっては、話しやすい相手ではなかったが、ジェイムズには何かじから信じられるものがあった。ぶっきらぼうながら、彼の生の声を聞いたという満足感があった。ためらうように、時には まとまりなく、困惑したように返される答えに、現代の若者の鼓動を聞くような気がした。ぎこちない表現の端々に、ジェイムズだけでなくタくの若者が持つ優しさ、葛藤を見る思いがした。そして、ビールを飲み、ゲップをしてみせるジェイムズに、なぜあれだけ大勢の若者が共鳴し特別な思いを抱いているのかわかるような気がした。――林洋子 CROSS BEAT 10月号より

インタビューのはじめに林洋子氏が「この間新譜のラップミックスを聞かせてもらったのですが…」というと「(ジェイムズが言葉を遮り、とぼけたように)えっ?新譜のラップ?ミックス?」「言葉かがもうラップ、ミックス皆を作ったのかと思って一瞬ギクッとしたよ!怖い」といったそうで、笑わせてもらった。

PARENTAL ADVISORY EXPLICIT LYRICS

「USE YOUR ILLUSION」にはってあったシール(アメリカ版)「レコ倫」みたいなもの。

TIME, ニューズウィーク日本版, CROSS BEATに載っていた批評を読んでわかることといえば、GUNS N' ROSESのことやアルバム「USE YOUR ILLUSION」のことではなくて、それを書いた人のこと。だから聴くのなら、他人の耳(批評)でやっぱり他人の耳っていうようなところがあるでしょ?)でじゃなくて、自前の耳で聴いてほしいな。CROSS BEATで米田実氏は「ロックが精神世界を豊かにし、現実について考える為の糧となり、ひいては人を成長させる等というきれいごとはハナから一蹴されている」と書いているけれども、GUNS N' ROSESの「USE YOUR ILLUSION」はそんなもの何も一蹴したりしてはいない。ロックが精神世界を豊かにしたり、現実について考える為の糧となったり、人を成長させるっていうことはたしかにあるし、それは別にきれいごとなんてことじゃない。だけどまちがってはいけないのは、精神世界を豊かにしたり、自分を成長させたりするのは聴く側の問題であるということだ。やる側がそういう意図をもって音楽をやるなんて、それこそきれいごとで、こっちの方で一蹴したいよね。やる側は、自分たちのやりたい音楽をやって、きく側がそれを自由にきいて、自分の精神世界を豊かにしたり、現実について考える為の糧としたり、自分を成長させたりすることもあるし、もちろん全くそういうことにならないことだってあるわけ。

ニューズウィークに「メタリカのメンバーは自分たちは本質的に野獣だと公言し」、「自分たちの怒りを表現するだけでなく、それを商品にすることもできる」と書いてあることと、林洋子氏のジェイムス観の、そのどっちにうなずくか、それがオスカー・ワイルドのいう「自伝の一種」ということなんじゃないかな?

MOVIE INFORMATION: 「レニングラード・カウボーイズ・ゴー・アメリカ」
10/11〜31日(10/24休映) 9:00〜10:20 PM
キノ青山 TEL: 5485-2890 ¥1,600
←渋谷駅から徒歩10分

「ロッキー・ホラー・ショー」 ¥1,300
10/14〜20日 8:15〜10:00 PM
バウスシアター TEL: 0422-22-3555